2004年度授業改善研修参加レポート　　所属（　短大　　）　氏名　龍　昌治

「研修会等名称」
　　私立大学情報教育協会　大学情報化全国大会

場所：私学会館アルカディア市ヶ谷
期間：2004.09.07 から 09.09

１．研修の内容

第１日
「 e-Learning への組織的な取り組み」の事例紹介として、３校の取り組みが詳細に説明された。なかでも通信教育への適用は、組織的な取り組みとして、従来の手法からの移行方法など、示唆に富むものであった。

- 「e-Learning によるリメディアル教育の実践と高大連携への展開」（千歳科学技術大学）
- 「教育学習支援と大学生活情報のための総合的システム」（明治大学）
- 「e-Learning による大学通信教育課程の実践と評価」（早稲田大学通信教育課程）

また社会科学系、理系（情報系）、医学教育の学系別に e-Learning の活用事例が３校から紹介され、引き続いてパネルディスカッションで「e-Learning 導入のノウハウと今後の課題」として討議や意見交換が行われた。

第２日
５つに分かれた分科会のうち、主として授業支援のためのシステムや体制整備のセッションに参加した。
手作りのシステムのポイントやその運営体制の整備では、多くの質問や意見交換が続き、多くの有益な示唆が得られた。中でも、組織体制については、学長直下のトップダウン形式によるものが、結果的に成功しているように感じられた。個人の努力で作られたシステムは、優れたものであっても他の教員へのひろがりに欠けがちである。一方で、外部の開発業者との連携で、有益なコースウェアを提供している事例もあり、試行錯誤段階ながら、複数のアプローチ方法があり、それぞれに最適な方法を探る必要があることが示された。

第３日
著作権処理への取り組みや留意点に関する説明の後、「ユーザによる教育・学務関連システム紹介」として、３校から紹介があった。情報システムメディアセンターや学科あるいは学部単位での支援システムや体制つくりが、重要であることが示された。なかでも、「Web によるクラス授業支援システム」（関西大学工学部）は、日常の授業実施を直接支援するもので、高い関心と評価を得ていた。

２．研修の成果

日常の授業改善に対する成果としては、多くの事例を見聞することによって、自身の授業を振り返り、改善への意欲を高めることにあった。また情報メディアセンターなど学内組織を利用し、活性化する方策については、他大学の状況を参考にすることが求められる。

自分自身の授業を客観的に観察し、改善への努力をすることは、容易ではない。教育研究・授業研究の対象としては、まだまだ不十分である。一方で教職課程のみならず、小中学校での授業研究は、その手法も含めすでに多くの研究成果がある。今般の e-learning など教育の情報化への取り組みは、大学の授業を研究対象にしていくきっかけとなっているといえよう。

e-learnnig のコースウェアを作成するには、教材研究とよばれる事前準備、授業計画や時間配分、評価手法などを、あらためて問い直し、組み立てなおす必要があるからである。成功事例として紹介された多くの事例では、はからずも、この問い直し作業を客観的に、かつ組織として行い、検討・再組み立ての過程をシステム化することに成功している。

学生による授業評価ばかりではなく、自分自身で授業を組み立てなおし、その過程を公開し、客観的な評価をすることの必要性や重要性を改めて認識することができた。同時に、研究対象として授業を分析し、複数の研究者による検証と理論への昇華を行うことが求められる。e-learning はそのきっかけになるし、研究対象としても、多くの可能性を持っていることが認識できた。

３．授業への研修成果の反映状況

「Web によるクラス授業支援システム」（関西大学工学部）は、オープンソースとして公開されていることもあり、早速９月からの授業に利用している。

対象科目：経済学部　情報ネットワーク論

受講人数が５０名と少ないため、パソコンを操作しながらの演習授業であるが、演習課題や小テスト、アンケートなど多彩な機能は、授業での利用に十分である。なかでも出席確認の容易さは、他のシステムにはないものであり、レポートの提出採点機能とともに、学生たちからも好評のようである。

このようなクラス授業支援システムは、部分的な機能は、従来からも提供されていたが、大学で作られたシステムだけあって、我々の授業感覚によくマッチした統合システムとなっている。

授業資料の事前作成や、９０分の授業展開を予測し、あらかじめシステムに登録しておくことが求められるが、授業準備として当然であるとともに、準備された授業は、教員にとっても、また学生にとっても学習に有効であることが実感できている。

引き続き、授業ので試行と検証を進めるとともに、学内の他の担当者にも試用してもらい、改良点などを探っていきたい。オープンソースゆえのユーザと開発者とのコミュニティを形成しており、さらなる改良と普及をすすめたいと考えている。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	総合企画課長	係